

しかし、ある意味で、今年の CPD において決議案が採択されなかったのは、「理解が足りない」アフリカ・アラブの国々に責任があるのではなく、多様な価値観を容認できない現在の国際社会の在り方を示したものであり、今回の顛末は、人口開発分野に一つの区切りをつけたようにも感じられる。1970年代の世界的な人口爆発に対する懸念から、「人口問題」は地球規模課題となり、世界的に対策が講じられた。その効果もあり人口増加率は低下し、人口爆発の危機は避けられたと思われた1990年代に、人口問題はマクロからミクロへ変換し、女性、リプロダクティブ・ヘルスを中心に据えたカイロ国際人口開発会議の行動計画が策定された。履行期間である20年間に、行動計画に盛り込まれた事項は実施されたが、その後に追加が試みられた Sexual rights や「包括的な性教育」といった、いわば「進歩的」な権利は、結局20年経っても世界全域では受け入れられなかった、ということであり、今後は、これまでとは異なったアプローチで人口開発を進める必要があるのだろう。

実際に国連では、安全保障理事会のみならず、CPD を包括する経済社会理事会の改革について議論されており、すでに国連総会議決 (A/RES/68/1) が2013年12月に採択されている。それに基づいて、来年4月に行われる第49回 CPD には、人口開発委員会の機能と作業方法についての見直しが行われることが今回決められた。国連人口部長ウィルモス氏の言葉を借りれば、今回の決議案が採択されなかったことは苦い薬のようなもので、これをばねに、今後の人口と開発について、そのあり方を見直すべき時期に来ている、という事である。折しも来年度の CPD のテーマは「ポスト2015年開発アジェンダのために人口のエビデンス・ベースを強化する」に決定し、人口というエビデンスをどのように生かして開発を進めるのか、評価とモニタリングにおける役割が、より重要になってくると思われる。

(本会合に関する文書類はすべて国連の web で公表され、会議ビデオも閲覧可能である。また社人研ウェブにそれぞれのリンクを掲載している。) (林 玲子 記)

アメリカ人口学会2015年大会

アメリカ人口学会 (Population Association of America) の2015年大会が4月30日～5月2日の日程でカリフォルニア州サンディエゴで開催された。セッション数は計239であり、分野の内訳は、「出生・家族計画・性行動・リプロダクティブヘルス」(36)、「結婚・家族・世帯」(35)、「子ども・若者」(15)、「健康・死亡」(44)、「ジェンダー・人種・エスニシティ」(8)、「移民・都市化」(25)、「経済・労働・教育・格差」(22)、「人口・開発・環境」(10)、「人口・高齢化」(12)、「データ・方法論」(17)、「応用人口学」(6)、「その他」(9)であった。また、ポスターセッションは9セッション(各90報告程度)設けられていた。

当研究所からは、林玲子国際関係部長、山内昌和人口構造研究部室長、菅桂太人口構造研究部室長、鎌田健司人口構造研究部主任研究官、福田節也企画部主任研究官と筆者の6名が参加した。このうち、林部長がセッション“Family, Fertility, and Well-being: Studies from International Census Microdata”にて“Assessment of the Disability Indicator Available through IPUMS International for the Calculation of Healthy Life Expectancy”, 山内室長がポスターセッションにて“An Empirical Analysis of the Effect of Fertility Measurement Choice on Subnational Population Projections: A Case Study of 47 Preferences in Japan”, 菅室長がポスターセッションにて“How Much Do Mortality Differentials Affect an Accuracy of a Population Projection? Evidence from a Projection for Japanese Municipalities”, 鎌田主任研究官がポスターセッションにて“Spatiotemporal Analysis of Marriage and Marital Fertility in Japan: Using Geographically

Weighted Regression 1980-2010”, 福田主任研究官がセッション “Marriage Markets and Assortative Mating” にて “The New Socioeconomic Marriage Differentials in Japan” との報告を行った。

年次大会の開催に先立ってサイドミーティングが開催されたが、筆者らは国際的な出生データベースである HFD (Human Fertility Database) のミーティングに出席した。ここでは、HFD 発足の経緯やデータベースの利用方法の紹介、実際にデータベースを利用した研究のプレゼンテーションなどが行われ、最後は HFD プロジェクトの今後の方針について参加者の間で議論が交わされた。

(余田翔平 記)

日本アフリカ学会第52回学術大会

2015年5月23日(土)・24日(日)に、愛知県犬山市犬山国際観光センター・フロイデにて、日本アフリカ学会第52回学術大会が開催され参加した。本大会では口頭発表95件、ポスター発表が12件あり、参加者は約350名であった。

筆者は、「アフリカの人口高齢化：健康・生活・ケアの現在と未来」と題するフォーラムに参加し、「アフリカにおける障害と健康寿命—センサスデータを使って」という報告を行った。アフリカはいまだ出生率が高水準であるため、高齢者割合の増加のスピードは遅いが、今後の高齢者の絶対数の増加はアジア・ラテンアメリカと同程度の規模であり、医療・介護制度の拡充など課題は大きい。またフォーラムでの意見交換などを通じて、アフリカにおける、高齢期以外の障害、つまり先天障害や交通事故、戦争により生じた障害や、精神障害についての研究が、現在数多く進行中であることが判明した。アフリカ学会のような地域学会では、多分野の研究者が集まり、新たな知見が得られ、有益である。

(林 玲子 記)